

日本語パートナークラス授業実践報告 ーオンラインツールを用いた留学生と 日本人学生との交流授業の試みー

日比伊奈穂・佐古恵里香

A Practical Report on Japanese Language Partner Class :
An Attempt to Use Online Tools at Exchange Classes
between International and Japanese Students

Inaho HIBI, Erika SAKO

【キーワード】日本語パートナー、交流、コミュニケーション、オンライン授業

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、2020年と2021年は留学生の来日が困難な状況になった。来日できなくなった留学生に対して、各大学はオンライン授業での対応を余儀なくされている。2021年度、追手門学院大学（以下、追大）でも交換留学生に対し、同時双方向型のオンライン授業を展開することとなった。

通常、来日する交換留学生は、大学で対面の授業を受け、空き時間に学内の学生と交流を図っている。こうした交流は、留学生にとっても学内の学生にとっても良い学びの機会となる。そのため、留学生が来日できない中、各大学では留学生と日本人学生の交流の場をオンライン上で設けるなど、さまざまな方法が模索されている。しかし、オンライン授業についてよく聞かれるように、「発言がしにくい」「相手との距離を感じる」などの問題があり、オンラインでの交流は容易ではないといえる。

そこで、本稿では2021年度春学期に行った交流を目的とした授業について、オンラインでの試みを報告する。また、留学生と日本人学生の交流の授業の活動内容もあわせて報告する。

2. 日本語パートナークラスの概要

2-1. 授業概要

日本語パートナークラスは、交換留学生が「日本語パートナー」と呼ばれる追大の学生（以下、日本語パートナー）のサポートを受けながら、教師から与えられた課題に取り組む授業である。交換留学生の日本語の授業の一環であり、日本語講座を受講する学生には必須の授業となっている。

レベル別に「入門・初級クラス」と「中級・上級クラス」に分かれている。

授業の主な目的は、交換留学生（以下、留学生）と日本語パートナーとなる学生の交流にある。授業では留学生と日本語パートナーがペア、またはグループになって課題に取り組むため、留学生にとっては日本語の学習だけではなく、生の日本語に触れ、実際に日本人とコミュニケーションをとる機会となる。日本語パートナーの学生にとっては、留学生の課題を手伝いながら、異文化の人とコミュニケーションをとり、さらにそれを通じて異文化を学ぶ機会となる。

日本語パートナークラスの授業回数は全8回である。2021年度春学期は5月27日より毎週木曜日3時間目に行われた。授業は通常、教室で行われるが、2021年度は新型コロナウイルスの影響により交換留学生が来日できなかったため、授業はすべて同時双方向型のオンライン形式で行われた。

2-2. 交換留学生について

交換留学生は2021年度春学期は8名であった。学生は日本語のレベル別に4クラスに分けられる。入門クラスはひらがなの学習から始めるクラスである。初級クラスの学生は初級後半レベル、中級クラスの学生は中級前半レベル、上級クラスの学生は上級前半レベルに当たる。詳細は表1のとおりである。

表1 2021年度春学期交換留学生の内訳

クラス	レベル (CEFR)	国籍
入門		ドイツ (1)
初級	A 1	アメリカ (2)
中級	B 1	韓国 (1)
上級	C 1	中国 (2)、韓国 (1)、アメリカ (1)

(カッコ内は人数)

2-3. 日本語パートナーについて

日本語パートナーとなる学生は、希望者の中から、留学生の人数に応じて選考される。ボランティアであるが、全授業への参加が求められている。

2021年度春学期の日本語パートナーは10名であった¹。このうち1名は2度の日本語パートナーの経験があり、他の9名は今学期が初めての参加であった。詳細は表2のとおりである。

1 途中で辞退した留学生がいたため、2021年度春学期は留学生より日本語パートナーのほうが多くなった。通常は留学生と同数か、若干少ない人数となる。

表2 2021 年度春学期日本語パートナーの内訳

学部・学科	学年
経済学部経済学科	4 年 (1)、2 年 (1)
経営学部経営学科	2 年 (1)
地域創造学部地域創造学科	2 年 (1)
国際教養学部国際教養学科	3 年 (2)、2 年 (1)
国際教養学部日本学科	4 年 (1)、3 年 (1)、2 年 (1)

(カッコ内は人数)

2-4. 利用したオンラインツール

2021 年度春学期、日本語パートナークラスの授業では SpatialChat を使って授業を行った。SpatialChat では参加者が画面上にアイコンで表示され、近くにいる人とだけ会話ができる²。アイコンは各自で移動可能であるため、参加者は画面上を自由に移動し、さまざまな参加者と会話ができる。ビデオとマイクのオン・オフの切り替えや、画面共有も可能である。

日本語パートナークラスでの活動は入門・初級クラス、中級・上級クラスとも、ペアやグループでの活動が中心となる。オンライン授業でよく利用される Zoom や Webex などの Web 会議システムでも、いわゆるブレイクアウト機能でペアやグループで活動することができる。しかし、そこでは各ペアやグループは他から分断されてしまう。教師も学生の様子を見るためには各部屋を出入りしなければならない。その点、SpatialChat では、各自がアイコンを移動させるだけでペアやグループを作ることができる。また、同じ画面上にいるため、他のペア・グループの様子を見たり、教師に質問をしたりもできる。

このように、SpatialChat は近くに人が来れば声が聞こえたり、遠くに行けば聞こえなくなったりと、現実の会話に近い雰囲気がある。日本語パートナークラスは交流が目的のクラスであるため、現実の距離感に近い雰囲気では会話ができる SpatialChat を用いることにした。

3. 入門・初級クラス

3-1. 授業の目的

入門・初級クラスの学習者は、日本語文法項目の未習が多く、かつ、日本語の会話などに慣れていないため、「交流授業で既習の文法事項の練習をさせること」と、「日本語母語話者の話す日本語に触れること」を目的としている。入門レベルの学習者においては、はじめての日本人との会話で心理的な負担がかかりすぎているかに注意をしながら、自発的な取り組みになるように配慮した。日本語パートナーは、国際化が進むと思われる将来において、初級レベルの日本語使用者に会った場合でも、場面に応じた日本語の配慮ができるようになることを目的としている。また、学生

2 参加者全員に向かって話す機能も備わっている。

同士の自由な会話を尊重するために、教員からは、必要以上の指示を出さないように心がけた。

3-2. 授業内容

入門・初級の授業では、双方向コミュニケーションについて考慮しながら、SpatialChat の特徴を生かした「ペアワーク」と「ロールプレイ」を中心に、授業計画を立てた。授業では、ペアでのタスクを中心に進めるため、オンラインホワイトボードの Google Jamboard³（以下 GJ）を使い、学習者と日本語パートナーが、コミュニケーションを取りやすいように、授業の準備を行った。

では、1 コマ 105 分の授業構成と内容について述べたい。まず、授業前に、追大の学習支援システム WebClass から、留学生と日本語パートナーのそれぞれに文法項目が学習できるように宿題を提示し、それを授業の前半部（最初の 30 分）のトピックとして、宿題内容を発表させた。中盤（次の 40 分）は、はじめの 10 分間をテーマの説明の時間とし、その後、宿題のトピックと同じ文法を使って会話が行える簡単なペアワークを 30 分間課した。例えば 1 回目のテーマは、「レストランのメニューを考える」である。各回に異なるテーマを与え、毎回、GJ 上に仮想の店等をレイアウトさせた。後半（35 分）は、仮想の店の店員と客に役割を分け、客役に、それぞれの店で買い物させるというロールプレイをさせた。各回の宿題とテーマは、表 3 にまとめている。また、GJ で使用する写真については、著作権に注意させ、自分で撮った写真などを使用するように毎回指導した。

表 3 入門・初級クラス各回の授業の詳細

回	宿題とテーマ	目的・目標（留学生）	内容
1	宿題「自己紹介シートを書く」 テーマ「レストランのメニューを考え、販売する」	・食べ物の名前を覚える ・物の値段を言えるようになる ・値段を理解し簡単な買物ができるようになる	前半：自己紹介 中盤：ペアでレストランのメニューや値段を考え、GJ に書く 後半：レストランの会話（店員と客）でのロールプレイ
2	宿題「あなたの部屋の紹介」 テーマ「理想の間取りを考え、販売する」	・自分の部屋にあるものの名前を覚える ・形容詞で自分の気持ちを表現できるようになる	前半：宿題のテーマについて話す 中盤：ペアで理想の家の間取りを考え、GJ に間取りを描く 後半：不動産の売買の会話（販売員と客）のロールプレイ
3	宿題「あなたの国の有名なお土産は何ですか」 テーマ「理想のお土産屋さんを考え、販売する」	・日本文化や留学生の国の文化についてお土産を通じて考える ・買い物で使用する表現を練習する	前半：宿題のテーマについて話す 中盤：ペアで店で売りたい品物の写真を用意し、GJ に値段とともに配置する 後半：お店での会話（店員と客）のロールプレイ

3 共同学習をより効果的に行うために、Google が提供する無償のウェブサービスであるホワイトボード機能を持つ Google Jamboard を採用した。学生らは、Google がホストする Cloud 上にある仮想のホワイトボードにアクセスして、書き込みを行ったり、写真の共有や編集などをしたりすることが可能である。このウェブサービスの機能を使うことで、より能動的な学生間の活動が期待される。

4	宿題「どこに旅行に行きましたか」 テーマ「ツアー旅行を企画して、販売する」	・ 日本や留学生の国の有名な観光地を知る ・ ツアーの魅力が伝わるような話し方を練習する	前半：宿題のテーマについて話す 中盤：ペアでツアーを企画し、GJ に内容をまとめる 後半：ツアー会社での会話（社員と客）のロールプレイ
5	宿題「趣味は何ですか」 テーマ「イベントアドバイザーとして夏休みのイベントを考え、販売する」	・ 初対面の人と会話をする ・ 友達を遊びに誘うことができるようになる	前半：自己紹介 中盤：ペアで夏休みのイベントを企画して GJ のカレンダーに内容を書く 後半：イベント企画会社での会話（店員と客）のロールプレイ
6	宿題：「町に何がありますか」 テーマ「あなたの理想の町を作って、遊びに誘う」	・ 物の位置（上、下、左、右）や建物の名前を練習する ・ 地図で行き方を伝えられるようになる ・ 人に依頼する表現を練習する	前半：宿題のテーマについて話す 序盤：ペアで協力して「理想の町の地図」を GJ に作成する 後半：「理想の町」に遊びに来たペアを遊びに誘い、地図を共有しながら、目的地までの行き方を示すというロールプレイ
7	宿題「私の一日」 テーマ「音読劇：かさじぞう」	日本語の自然なイントネーションを練習する	前半：宿題のテーマについて話す 後半：『げんき I』第 10 課「かさじぞう」を音読する
8	「日本語プレゼンテーション」(Zoom)	日本語でプレゼンテーションをする	・ 留学生が日本語でプレゼンテーションを行い、日本語パートナーがコメントをする ・ 日本語パートナーが司会を担当する

※5 回目に日本語パートナーの入れ替えを行った。

ロールプレイの流れを簡単に説明する。1 巡目は、日本語パートナーに店の店員の役を、留学生には客の役をさせた。合計でペアが 3 組できるので、異なる 3 名と会話をすれば、1 巡目は終わりである。2 巡目は、日本人パートナーと留学生が役を交代し、留学生が店の店員の役、日本語パートナーが客になる。同様に、ロールプレイをさせる。同じトピックで、合計 6 回話することができるため、留学生らの会話練習に役立つことが期待される。

3-3. コメントシートの分析

毎回の授業の最後に、留学生と日本語パートナーに任意でコメントシートに記入してもらった。(1)「授業の感想を自由にご記入ください」、(2)「うまくいった点があれば、書いてください」、(3)「うまくいかなかった点があれば書いてください。うまくいかなかった点は、どうしたら次は良くなると思いますか」という 3 つである。学生の自然な気づきにつながるような質問項目を用意した。

以下、定性的な評価資料として、学習者のコメントを掲載する。コメントの一部を紹介しながら、授業内容の考察をする。(コメントは、学習者の原文のままである。下線部は筆者による。)

「I really liked the special chat that we used, because it feels like sitting in an actual class. I also liked that we used the Jamboard, because it makes working together easier and fun. I liked that everyone had to introduce themselves and that every student was very polite and willing to communicate. I liked that the students were really supportive and tried their best to help me understand! : -)」(留学生)

上記のコメントからは、GJ と SpatialChat を組み合わせることで、対面授業をしているような雰囲気、授業を受けていたということがわかる。

以下のコメントは、ひらがなを覚えてたの留学生と、英語があまり得意でない日本語パートナーのペアで、お互いに言葉が通じないことで、苦勞をしていたことがわかる。

「諦めずに話そう、伝えようとすれば通じ合えたことです。」(日本語パートナー)

「Despite me having trouble communicating with my partner, we still made it work and we didn't give up. It was a challenge but I really appreciated my partner and liked our result!」(留学生)

このペアは、1 回目の授業で、ペアで「レストランのメニュー」を作らせた時に、全く会話が進まず、5 分以上発話がみられない状態が続いたが、ぼつりぼつりとどんな単語だったら相手が理解できるのかを探りながら言葉が出てくるようになり、最終的に、留学生の国の名物料理であるソーセージなどを加えた「レストランのメニュー」を完成させることができた。発話が續かない状態がみられたが、結果的に、二人とも肯定的なコメントを残しており、学びにつながったことがわかる。

最後に、日本語パートナーがこのクラスをどのように考えて、改善行動していたのかをコメントから考察する。

「私が英語を理解できていないため、相手が困っているとき上手く助言することができませんでした。日本語が理解できないことに相手の方はとても申し訳なさそうにしていたため、私もすごく申し訳なかったし、日本語が嫌になってしまわないか不安になりました。話す前には、英語では何なのか。より簡単な日本語は何か。を準備して臨むとより良くなると痛感したため、次回に生かします。」(日本語パートナー)

この日本語パートナーのコメントからは、内省していることがわかる。この学生は、自分の発言がうまくいかなかったことを反省しており、次の授業のペアワークではしっかりと留学生の既習の文法項目の予習をしてきていた。また、この学生に限らず、日本語パートナー全員が、第1 回目の授業が終わった後から授業前の文法の宿題によく取り組むようになった。この行動の変化は1 ターン(第1 回～4 回)が終わるまで続いた。そして、日本語パートナーが入れ替わった後の2 ターン目(第5 回～8 回)も、内省、気づき、改善という能動的な行動の変化がみられた。

留学生と日本語パートナーは、初回の授業では、お互いにはじめて出会う異言語・異文化への驚きや戸惑いがみられ、授業の意義や学習効果がみえにくかったことが考えられる。しかしながら、2回目、3回目と授業の回を重ねるに連れて、留学生も日本語パートナーも積極的な授業参加をしていることがコメントシートからわかる。能動的に参加する姿勢が行動の変化につながっていたと考えられる。

4. 中級・上級クラス

4-1. 授業の目的

中級・上級クラスの日本語パートナークラスの目的は、留学生、日本語パートナーともに異文化を学ぶことにある。ペアやグループで活動、交流をしながら、各国事情を知り、また、自国の文化を振り返る機会にしてほしいと考えた。

そのほか、留学生はいわゆる中級、上級レベルにあるため、日本語パートナーとの交流から「生の日本語を学ぶこと」、そして、「日本語でのコミュニケーション力を養うこと」を目的とした。日本語パートナーは、留学生に日本語を教えるを通して、「日本語の表現や特徴について考えること」や、相手にわかりやすく伝える工夫をすることから、「コミュニケーションのとり方を学ぶこと」を目的とした。

4-2. 授業内容

中級・上級クラスの授業の詳細は表3のとおりである。中級・上級クラスでは発表を中心に授業を行った。授業の前半ではその日のテーマの発表をペアやグループで行った。発表では、Spatial-Chatの自由に移動できる利点を生かし、ペアやグループを数回変えるようにした。ペアやグループを変えることで、さまざまな考え方に接し、また、多くの知識を得てほしいと考えた。後半は、次回のテーマの準備の時間とし、留学生と日本語パートナーがペアやグループで内容を検討した。

表4 中級・上級クラス各回の授業の詳細

回	テーマ	形態	目的・目標（留学生）	内容
1	お互いを知ろう	グループ	・お互いを知る ・交流を深める	前半：各人が10の質問を用意し、日本語パートナーと留学生が質問し合う 後半：第2回の授業準備
2	大学を紹介しよう	ペア	・日本語で意見を述べるができる ・テーマに即した内容を的確な表現でまとめられる	前半：留学生が各大学を紹介 後半：第3回の授業準備
3	国／地域の文化・習慣・生活を紹介します	ペア	・日本語で意見を述べるができる ・テーマに即した内容を的確な表現でまとめられる ・日本の日常生活を知る	前半：留学生、日本語パートナーとも自国・地域の日常生活を紹介 後半：第4回の授業準備

4	多様性・多文化理解のイベントを企画しよう	グループ	・日本語で意見を述べ、交渉することができる ・「多様性・多文化」を考える	学内での多様性・多文化理解のための企画を考え、発表
5	町を紹介しよう	ペア	・新しい日本語パートナーと交流を深める ・地図を用いて、方向性を意識しながら説明できる ・雰囲気を変えながら町を紹介できる	留学生が日本または自国の町を紹介
6	旅行を企画しよう	グループ	・日本語で意見を述べ、交渉することができる ・町や文化の魅力を伝えることができる	来日した交換留学生との日帰り旅行を企画
7	旅行を企画しよう	グループ	・日本語で意見を述べ、交渉することができる ・町や文化の魅力を伝えることができる	来日した交換留学生との日帰り旅行の企画・発表
8	日本語プレゼンテーション (Zoom)	全体	・日本語学習の成果を発揮する ・日本語学習を振り返る	・留学生が各自の興味に応じたテーマで、日本語で発表 ・日本語パートナーがコメント

※5 回目に日本語パートナーの入れ替えを行った。

4-3. コメントシートの分析

授業では、8 回目を除き、毎回コメントシートを用意した。授業に関して自由に記述してもらうほか、うまくいったこと、うまくいかなかったこと、次の授業への目標などを回答してもらった。以下、コメントシートの回答をもとに、授業や学生の様子について考察したい。

留学生からは、残念ながら 1 名の学生から、3 回回答が得られただけだった。回答した学生からは「日本の友達とお話できて楽しかった」「みんなが気楽に接してくれてよかった」など、交流を楽しんだ様子がうかがえる（コメントの表記は原文のままである）。一方で、うまくいかなかった点として、「言葉じりを濁さずに文章を終わらせる練習が必要だ」「まだ自然に話すのは難しい」などの回答があり、自身の日本語使用を振り返っていることがわかる。今回の授業では留学生に日本語使用について振り返らせる機会を設けなかったが、今後、内省する活動を取り入れることも検討したい。

次に日本語パートナーからのコメントを考察する。

最も回答が多かったのはコミュニケーションに関するコメントである。うまくいった点としては、「お互いが楽しく会話できた」「たくさん会話することで、少し距離が縮まったような気がします」「相手の話を広げること」「相手が伝えようとしている内容を読み取ること」などの回答があった。反対に、うまくいかなかった点や改善点としては、「私から積極的に話しかけるなど、お互いに打ち解け合えるように頑張ろうと思います」「海外の学生さんが話す日本語の理解をうまくしてあげることができなかった。できるだけメモを取り、聞いてみることで改善することができるか試してみようと思っている」などの回答があった。これらの回答から、日本語パートナーの学生た

ちは、会話が楽しく進められるように努力や工夫をしながらコミュニケーションをとっていることがうかがえる。

次に多かったのが、留学生の日本語のサポートに関するコメントである。「ニュアンスの難しい表現が出てきて会話に困っていらしかったが、すぐに助言ができた」「留学生にたくさん質問をして、出来るだけ日本語を使う機会を増やせるようにしたい」「もっとわかりやすい日本語も交えて 100% 伝わるようにする」などの回答があった。これらの回答から、日本語のサポートをするという役割を意識していることがわかる。特に、「わかりやすい日本語」という表現がよくみられたことから、留学生に話す時に表現の工夫をしていることが推察される。

そのほか、グループ活動での役割や、ディスカッションに関するコメントも見られた。「みんなでアイデアを出しながら、全員が参加できた」「留学生の方が日本語のディスカッションができていて、もっと発言できるようにならないかなと思いました」「今回はもっと自分の意見をしっかりとすることができた」などである。協力し合うことの難しさや達成感、意見を述べる姿勢の違いなどを、授業の活動を通して感じ、学んでいることがうかがえる。

5. 日本語パートナークラス授業実践の考察

本節では、2021 年度春学期の日本語パートナークラスの授業を振り返り、留学生と日本語パートナーの交流について考察したい。

今回の授業では、留学生は日本人と、日本語パートナーは留学生と話すことが初めての学生がほとんどであった。そのため、コミュニケーションをとることに苦心していることが、授業の様子やコメントシートからうかがえた。特に入門・初級クラスでは、留学生の日本語が限られているため、言葉が通じなくて葛藤している場面がよく見られた。しかし、留学生も日本語パートナーもコミュニケーションを成立させようと努力していた。たとえば、ロールプレイでは、留学生も日本語パートナーも 1 回目で失敗したことを 2 回目では改善を試み、その結果、回を重ねるごとによりスムーズに会話を成立させることができていた。中級・上級クラスでは会話が成立しないということは見られないが、相手の言ったことが理解できなかった時への対応は、回を重ねるごとに改善していた。

今回の授業では SpatialChat を用いたため、ペアやグループ替えがスムーズで、同じ内容を複数の対象者とロールプレイや発表をすることができた。そのため、留学生も日本語パートナーもうまうまういかなかったことをすぐ次に改善して実践することができ、その改善の効果を実感する機会が多く得られたのではないかなと思う。また、コミュニケーション上の問題に関しても、オンラインであることを起因とする問題を挙げる声は聞かれなかった。対面の場面に近い SpatialChat というツールを用いたことにより、話しやすさを評価するコメントが見られたぐらいである。SpatialChat のような実際の会話の場面に近い状況でコミュニケーションが取れるアプリケーションの活用は、交流活動において有効に働くと考えられる。

留学生にとっては、総体的にこの日本語パートナークラスは生のコミュニケーション実践の場と

なったのではないかとと思われる。実際のコミュニケーションから、意思が伝わった時の喜びを感じたり、学習意欲が掻き立てられたり、また、意思を汲み取ろうとしてくれる相手への敬意を感じたりしたことがコメントシートからうかがえた。こうした経験は今後の日本語学習への意欲につながっていくと考えられる。

日本語パートナーの学生も留学生との交流の経験は役に立ったようである。授業終了後のアンケートで、日本語パートナークラスの活動が「役に立った」と回答した学生に理由を聞いたところ、傾聴の大切さへの気づき、異文化の人と接することへの抵抗感が下がったこと、また、語学学習への意欲が高まったことや、改めて日本語について考えたことなどが挙げられていた。留学生との交流活動を通じて、異文化を知るだけでなく、言葉やコミュニケーションの取り方を考えるきっかけになったことがわかる。

では、授業として交流活動を行うことにはどのような意義があるのか。おそらく留学生と日本の学生の交流の場は各大学に設けられているだろう。そうした場と授業として交流活動をするとは何が違うのか。

それは、授業での交流は統制された活動であるということである。授業では、活動の一つ一つに目的がある。留学生にとっては日本語能力を高めるための目的がある。日本語パートナーは、その目的を理解し、その達成のために留学生をサポートすることが役割である。留学生、日本語パートナーともに、自由に話す時とは異なり、授業では目的を達成するために、コミュニケーション上の問題が生じて、粘り強く取り続けなければならない。特に達成目標もなく自由に話すのであれば、問題が生じた場合、そこであきらめるという選択もある。しかし、授業の場合はそれができない。そのため、先に述べたように、学生たちは試行錯誤しながらコミュニケーションを成立させようとする。

また、日本の学生にとっては、異文化の人と接した経験がない場合、授業であることの安心感があるようである。日本語パートナーに応募した学生からは、「大学の交流の場で留学生に接するのは自信がない。留学生の学習をサポートする経験から始めてみようと思った」というような声が多く聞かれた。日本の学生の中には、外国の人と交流したいと思いながらも、英語への苦手意識から、交流活動に踏み出せない学生もいる。そうした学生にとっては、役割が明確な授業での交流は抵抗感が少なくなるのだろう。

こうしたことから、授業として交流活動を行うことは意義があることだと言えるだろう。留学生が来日できるようになり、日々の生活の中で交流できるとしても、交流を目的とした授業は、留学生、日本の学生ともに有益な経験の場となると考えられる。

6. まとめ

留学生と日本の学生との交流は、残念ながら、なかなか進んでいないのが現状ではないだろうか。各大学、両者をつなぐ試みがさまざまなされいながら、いまだ模索状態が続いている。追大での日本語パートナークラスの試みもその一つである。新型コロナウイルスによる移動制限の緩和

後は、対面、オンラインなどさまざまな方法がとられることになるのではないと思われる。そうしたさまざまな取り組みについての情報交換や意見交換が活発に行われ、学生同士の交流が促進されることが今後も期待される。

参考資料

坂野永理（2012）『初級日本語 げんき I』ジャパントイムズ

国際交流基金（2013）『まるごと 日本のことばと文化 入門 A1 かつどう』三修社

田中真理・阿部新（2014）『Good Writing へのパスポート－読み手と構成を意識した日本語ライティング』くろしお出版

CASIO×MAU 産学協同プロジェクト につぼん多文化共生発信プロジェクト2019「きづくをきずく」
<https://web.casio.jp/mau/works2019/05.html>（2021年6月17日最終閲覧）

参考文献

坂本利子・堀江未来・米澤由香子（2017）『多文化間共修－多様な文化背景をもつ大学生の学び合いを支援する』学文社